

# ドイツボン大学

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学政治経済学部 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池田, 功 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/8203">http://hdl.handle.net/10291/8203</a>

# ドイツ ボン大学

二〇〇三年四月より二年間に渡って在外研究をいた  
だき、ドイツ連邦共和国（以下ドイツ）の大学の客員  
研究員をすることができた。最初の半年間はスイスと  
の国境に近い南ドイツのフライブルク大学であり、そ  
の後一年半は旧西ドイツの首都であったボンの、ボン  
大学・日本文化研究所であった。

ドイツの大学は歴史が古いためか、一般的にキャン  
パスが小さく建物が町中に点在しているという感じで  
あるが、しかし、ボン大学は違っていて、ボン中央駅  
から徒歩五分程の所に位置しながらも広大なキャンパ  
スに恵まれている。それはなぜかといえば、昔の王宮  
をそのまま利用しているからである。四〇〇メートル  
くらいも続く一直線の建物と広々とした中庭が心をな  
ごませてくれる。

池田 功

ドイツには約三五〇程の大学があるが、実際私がそ  
の大学に接して日本の大学のシステムと異なっている  
とびっくりしたことがいくつもある。それを少し列挙  
してみよう。

第一は原則として入学金も授業料も無料ということ  
である。

第二に原則として単位という制度がなく、卒論が受  
理されて卒業となるために、最短三年半くらいからあ  
とは何十年いてもよいということである。もつとも、  
多くの学生は六年程在籍しているというが。

第三に高校の時にアビトゥ（大学入学資格）を取得  
すると、原則的にどこの大学のどの学科にも入学でき  
るということである。

第四に転科、転部、あるいは転校がかなりの規模で

行われているということである。一旦入って、自分に向いていないと分かると、専攻を変えてゆく。あるいはより自分に近い指導教授を求めて大学そのものを變えて行くということである。それ故に、入学した大学と卒業した大学が違っているということがよくある。たとえばハイブリッヒ・ハインは私のいたボン大学に入学しながらも、ゲッティゲン、ベルリンの各大学を転々とし、ゲッティゲン大学を卒業している。

第五に大学教授のステータスの高さである。それは各学科に教授は一名で、後は副教授、助教授一名というシステムのために教授の数が少ないということもあるのであろう。しかし、教授はよく勉強し、教育熱心であると感じさせた。私の知っている教授は毎日のように研究室に来て、ドアを開けっ放しにし、学生がいつでも卒業などの相談にのれるようにしていた。

第六に卒業生は原則としてその大学には残らず、他大学に教職を求めて動くという仕組みである。その公平さは立派であるが、しかしややストイックなものを感じさせるし、愛校心というものを欠如させていると感じさせたのも事実であった。

第七に留学生の多さである。ボン大学は三八〇〇〇

人とかかなり大きな大学であるのだが、そこに約三〇〇〇人の留学生がいた。単純な比較はできないにしても、ほぼ同じ規模の明治大学のおよそ一〇倍である。

第八にその国籍、人種の多彩さである。私が在籍していたときのボン大学の学長はスイス人であり、私がお世話になつていた日本文化研究所、日本学科の二人の教授は共にオーストリア人であった。とまあ、こんな感じであげてゆくと、きりがなくらい彼我の相違を感じさせるのである。

さて、ドイツの学問ということに関して私なりに体験したことがあり、それについて少し記してみたい。

私はボン大学主催のドイツ語初級講座に通った。一クラス二〇人以下で、世界中から学生がきていた。私のクラスはスペイン人三人、カナダ人二人、インド人二人、後はイタリア、メキシコ、イラン、中国、韓国、北朝鮮、そして日本人が三人であり、ほとんどが二〇代の男女であった。講師は三〇歳前後の女性であった。

私は一九八八年から二年間韓国の大学で教員をしていた時に、延世大学の韓国語学堂で韓国語を習った。

ことがあり、またその後明治大学においても留学生に日本語を教えてきた。授業を聞きながら私は韓国での教え方を思い出していった。その時の教え方はテキストにそって発音や基本的な会話を何度も何度も繰り返して、二ヶ月後には何とか会話が通じるようになったのであった。それに対してこのドイツ語の講師は、私が求めている音読の繰り返しをあまりせず、初級の受講生に対してもドイツ語で、文法の説明を繰り返すことばかりに熱心なのである。

彼女の熱心さは疑うべくもないのであるが、しかし、今私が必要としている生活のための会話の発音練習をほとんどやらず、ドイツ語で文法を説明してばかりいる。つまり、私達をドイツ人の幼稚園生か小学生と思っていて、ゼロからスタートしているという外国人人という発想がないのである。しかし、韓国では違っていた。今すぐにも必要な会話を、何度も何度も繰り返していたのであった。

何故こんなに違うのだろうかと私は考えてしまった。まず、ドイツの大学のシステムからもたらされていることなのかもしれないと思つた。つまり先ほども記したが、ドイツでは入学してきた学生がそのままそ

の学科や大学にいるわけではなく、かなりの学生が転部、転科や転校をしているのである。嫌になればあるいは自分に向いていないとなれば簡単に出ていってしまう。教える方もそれを承知しているので、点数を辛くつけるし学生がいなくなっても特別気にするわけでもない。あくまでも自分の世界を展開するだけである。学生の方が変更すればよいのである。そのようなシステムの中で育ってきた若い講師は、学生が分かるうが分かるまいがあくまでも自分の世界を展開するという、そういう発想からなされているものなのかもしれないということである。

あるいは、またこれはドイツの学問そのものからなされているのかもしれないと思つた。一般的にドイツの学問とは観念的で論理的で非実用的で理屈っぽく、教養というか哲学を教えることが中心の世界である。つまり直接的に役に立つということよりも、考える力としての土台を築くことが学問とされている。それに対してアメリカ型の学問はどちらかといえば、プラグマティックで直ぐに役に立つこと、使えることが求められてきたのではなかったか。

日本は「明治十四年の政変」以来、薩長藩閥政府に

よってドイツの学問一辺倒になり、ドイツ学を中心にして系づけられてきた。旧制高校などがそういうシステムの中で行われた。しかし、戦後はアメリカ型の実用的な学問が幅を利かせるようになった。韓国もそうであった。もちろんドイツでも専攻によってはアメリカ型が多くなっているであろうが、本家であるドイツではまだ観念的な学問が中心であろう。つまり、このドイツ語の講師が、すぐに役立つ会話よりもまずは基礎としての文法が重要なのだと認識していたとしても何等不思議ではないのである。

私はまさにそういうドイツ型の学問の洗礼を受けて四苦八苦しているのだと思うと、不思議な感動が生まれてきた。ドイツ語と共にドイツの教育の精神を学んでいるのであるから。そしてその理屈っぽさこそ、力で押し切って行こうとする今日のアメリカ主導の世界に対して、「否」を言い得る一つの良識になっていると考えに及んで、この苦しみも結構なことではないのかと思うようになったのである。

